論　文

保育所保育が保護者の子育て支援の満足度に与える影響の要因構造に関する検討
－保護者の意識の違いによる分析－

○廣瀬春次*1　田中浩二*2　梅木幹司*1

キーワード：子育て支援、保育内容、保育所保育、満足度、構造方程式モデリング

I　はじめに

石川・堀[1]によれば、平成3年ごろから、核家族化や地域のつながりの希薄化に伴う子育ての孤立感や負担増を背景に、政府関係の報告書等で「子育て支援」という言葉が使われはじめた。そして平成11年の保育所保育指針において、保育所に通う子どもの保護者に対する支援を行う役割が明記され、平成29年に告示された保育所保育指針[2]でも、「保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである」と記載されている。これは、社会全体で子育てを担うという視点に沿ったものである。

今日、子育て支援は、様々な施策が実施される中で、その内容や担い手、場所が拡大しつつあり、その言葉も多様な意味で用いられるようになっている。子育て支援は、出産手当等の子育ての経済的負担の軽減や育児休暇等の働く人の時間的・肉体的負担を減らすなど少子化対策を含む制度として、あるいは子育てに関する相談、子育て親子の交流の場の提供、子育てに関わる事業等の情報の提供などを含む地域子育て支援拠点事業として実施されている。また、その支援の担い手に関しても、以前は育児・保育に関する相当の知識および経験を有する保育士であったのが、現在は「医療・教育・保育施設や地域の子育て支援事業等に従事することができる資格を有していている者」[3]となっており、多様な職種が担うようになった。またその場所も、保育所等の指定施設から公共施設や空き店舗などに広げられている。

このように子育て支援は、様々な制度や事業として展開されているが、保育所に通う子どもの保護者に対する子育て支援は、他とは異なる特性を持つ。実際、入所する子どもの保護者に対する子育て支援は「日常の保育と一体に行われる」[4]という点で、ほかの子育て支援の資源とは異なる。保育所の子育て支援の一つである「保育相談支援」において、保育士は日々の保護者との触れ合いの場で保護者との信頼関係を育み、育児に関する情報の提供や収集を行い、家庭の実情にそった働きかけを行うことができる。更に、子どもに対する保育と保護者に対しての子育て支援は必ずしも切り離して考えられるものではない[5][6]。地域子育て支援センターの職員が、子どもに対しては親を介しての間接的な援助を行うのに対し、保育所の保育士は子どもの成長、発達に直接的な責任を有し、援助は子どもに対して直接的に実施されている[7][8]。保育所における保育は、家庭における養護と教育の役割を担うものであり、保育士は子育てを家庭と一緒に行っていることになる。このことは、子どもの最善の利益と保護者の思いを巡って保育士と保護者との間に大きな葛藤をもたらす可能性もある[9][10]。

以上のように、保護者にとって、保育所における保育そのものが直接的な子育て支援になっていると考えられる。子どもの言葉の発達の遅れを心配する母親に

*1　至誠館大学　現代社会学部
*2　東京成徳短期大学　幼児教育科

とって、保育所において言葉の発達を促す豊かな経験を子どもが持つことは、子育てに対する支援として認識される。発達障害の子どもを持つ保護者にとって、子どもが集団活動に参加できるようになることは、子どもの成長を実感し、保育所に対する信頼や満足を高めることになる。しかしながら、保育のどのような内容が子育て支援として必要であると保護者が認識しており、どのような要因が保護者の子育て支援に対する満足度を高めることになるかを明らかにした研究は見当たらない。保育所は福祉施設でもあるという観点から、保護者のニーズに合った支援を行い、その満足度を上げていくことが求められる。従って、本研究では、保育内容と子育て支援に関する保護者の意識が保育所保育に対する保護者の満足度にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とした。

II　方法

i　調査目的および調査対象・方法

本調査は、保育所で実践されている保育が、保育所を利用している保護者の子育て支援に有益な効果を及ぼしているのかを定量的に把握することを目的として実施した。

調査対象は、山口県内に所在する公立および私立保育所 301 か所とした。本調査では、保育所ならびに保育士、保護者の 3 者の意識の把握を目的としたため、調査対象である保育所について、保育所の意識としては所長や園長（以下、所長）や主任保育士など保育所運営に携わる者が回答し、保育士については保育士が、保護者については保護者が回答した。1 保育所につき保育所の意識が 1 件、保育士が 5 名、保護者が 10 名回答してもらった（配布数は保育所 301 件、保育士 1,515 件、保護者 3,010 件）。なお、調査票は郵送にて配布・回収した。調査は平成 26 年 3 月に実施した。

ii　調査内容

調査内容については、保育および子育て支援に関連する質問項目群（I～V）を設定し、保育所ならびに保育士、保護者それぞれの視点から回答する構成とした。具体的には、項目群I「基本情報」では、年齢や経験年数など回答者の基本属性に関する項目、項目群II「子育て支援に関する意識」では子育て支援に関する意識（5 項目）を設定した。さらに、項目群IIIでは保育所保育指針に基づく保育内容として 45 項目、項目群IVでは子育て支援に関連する保育内容として 20 項目、項目群Vでは保護者が参加する行事等について 15 項目をそれぞれ設定し、保育所では意識や実施状況を、保育士および保護者にはこれらが保護者の子育て支援に対して有効であるかについて回答してもらった。なお、回答は、3 件法および 4 件法による選択肢として設定し、それぞれ該当する回答を選んでもらった。

iii　分析方法

本研究では、研究の趣旨に則り、保護者の回答を分析対象とした。また分析を行う項目については、先の調査内容の項目群I基本情報および項目群II、項目群IIIを用いて分析を行なった。

項目群Iでは、対象者の基本属性を把握するために、性別の記述統計量を算出した。

項目群IIでは、保護者の意識として、設問 4 の満足度、設問 5 の今以上に子育ての支援を望むか、の 2 変数を分析対象とし、記述統計量を算出するとともに、相関分析を行なった。

さらに、保護者の満足度を構成する要因の検討および、保護者の意識による要因構造の差異を検討するために、まず対象者全体を母集団として、項目群III保育内容に関する 45 項目での探索的因子分析を行なった。因子抽出の方法は最尤法、回転は観測変数間の相関が想定されるためプロマックス回転を用いた。因子分析の結果、因子負荷量が 0.4 未満の項目および因子負荷量 0.4 以上で複数の因子にまたがる項目を除外して因子分析を繰り返した。因子分析が収束した際、生成されたスクリープロットの傾きおよび固有値から因子を

抽出した。さらに、各因子に属する項目が5項目以上になった因子は、因子負荷量が高かった上位5項目を確認的因子分析の項目として採用し、因子構造を抽出した。

探索的因子分析の結果に基づいて、構造方程式モデル（初期モデル）を作成した。その際、作成されたモデルとデータの当てはまりの良さを示す適合度として、CFI（Comparative Fit Index）、NFI（Normed Form Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）、AIC（Akaike's Information Criterion）を求めた。

CFIおよびNFIは、0.00から1.00の間で示され、1.00に近いほど良いモデルとされる。RMSEAは、0.05以下であれば当てはまりの良いモデル、0.1以上であれば当てはまりの悪いモデルと判断される。AICは、値が小さいほど良いモデルであると判断される。

探索的因子分析で得られた結果に基づく初期モデルの適合度が満たされた際、データと当てはまりの良いモデルであると判断し、保護者の意識の違いによる満足度の要因構造の差異を確認するための確認的因子分析を行なった。確認的因子分析では、潜在変数間で結ばれる共分散および因子平均を比較するために多母集団同時分析を行なった。多母集団同時分析を行う際、その前提となる配置不変モデルの成立の確認を行なった。配置不変モデルは、複数の母集団でひとつのモデルが共有できるかを確認するために行われるものであり、保護者の意識によって区分された群での配置不変モデルを確認した。

配置不変モデルの成立を確認した後、保育内容から生成された潜在変数から満足度へ向かうパス係数および潜在変数間の共分散を比較するために、満足度へ向かうパス係数を除くすべて観測変数に向かう係数を、群間で同じにする等値制約を課した測定不変モデルを作成し、多母集団同時分析を行なった。

分析には、SPSS24.0JおよびAmos25.0を使用した。

III　結果

i　対象者の特性

301か所の公私立保育所に調査票を配布し、保護者から1,585件（回収率52.6%）の回答を得た。そのうち、本分析の対象となる項目群IIおよびIIIで未回答があるものを分析対象から除外した。その結果、1,484件を分析対象とした。

保護者の平均年齢は36.2歳（SD±5.3歳）、性別は女性が1,342件（90.4%）、男性が137件（9.2%）であった（表1）。

ii　保育所による子育ての支援に対する保護者の意識

項目群IIの設問4および5についての結果を表2に示した。項目群IIでは、保護者に対する子育ての支援に関する意識を質問した。設問4「保育所や保育者が

表1　分析対象者の属性（性別）　n=1484

n=1484

項目	度数	パーセント
女性	1342	90.4
男性	137	9.2
未回答	5	0.4

表2　項目群II−設問4および設問5の結果　n=1484

n=1484

項　目	満足していない・望まない	あまり満足していない・望まない	まあまあ満足している・望む	満足している・望む
II−4 保育所での子育ての支援に満足しているか	3 (0.2)	19 (1.3)	447 (30.1)	1015 (68.4)
II−5 今まで以上の子育ての支援を望むか	159 (10.7)	559 (37.7)	532 (35.8)	234 (15.8)

注 各セルの値は度数、カッコ内はパーセント

行っているあなたへの子育ての支援に満足していますか」については、98%以上が「まあまあ満足している」、「満足している」と回答した。設問 5「保育所や保育者が今まで以上にあなたの子育ての支援をすることを望みますか」については、「望まない」「あまり望まない」と回答した望まない群と、「まあまあ望む」「望む」と回答した望む群がおよそ半数という結果になった。

なお、設問 4 の満足度と設問 5 の支援を望むか否かの相関は確認されなかった。

iii　探索的因子分析

保護者への子育ての支援において、保護者の満足度に影響を与える要因構造の分析を行うにあたり、項目群IIIの保育指針に基づく保育内容に対する有効性の設問 45 項目の探索的因子分析を行なった。因子負荷量が 0.4 未満の項目を削除しながら因子分析を繰り返し、4 回目で収束した。1 因子の項目が 5 項目を超えた際には因子負荷量が高い 5 項目を抽出した。その結果、6 因子 27 項目が抽出された（表 3）。6 因子抽出後の負荷量平方和の累積分散は 64.6%となった。

第一因子には、「Q.42 子どもが様々な素材や用具を使って創造的に描いたり作ったりすること」や「Q41 子どもが音色やリズムの楽しさを味わうこと」、「Q.44 子どもが感じたり想像したことを自由に表現したり演じたりすること」など表現に関する項目であったため、因子名を「表現活動」とした。

第二因子には、「Q.24 子どもが身近な人にいたわりや感謝の気持ちを持つこと」や「Q. 22 子どもが生活の中でのきまりの大切さに気づき守ること」、「Q.36 子どもが人の話を注意して聞き、相手に分かるように話すこと」といった対人関係や社会生活に関する項目が中心であったため「対人・社会関係」と命名した。

第三因子には、「Q7. 保育者が子どもの欲求へ応答すること」や「Q.4 保育者が子どもの生理的欲求を満たすこと」、「Q.5 保育者が子どもの生活の援助をすること」など、保育者が子どもの欲求に応答したり、生活の援助を行う項目が中心となったため、因子名を「欲求・生活の援助」とした。

表 3　保育内容の有効性に関する因子分析結果

因子名	項　目	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子
表現活動	Q.42　素材や用具を使用し創造的に作成できる	0.957					
	Q.41　音色やリズムを楽しさを味わう	0.899					
	Q.44　想像を表現したり演じられる	0.873					
	Q.43　他者と共同作業が楽しめる	0.847					
	Q.45　表現したものを見せたり聞かせたり	0.825					
対人・社会関係	Q.24　身近の人への感謝の気持ち		0.798				
	Q.22　生活の中での決まり事		0.710				
	Q.36　人の話を聞き、わかるように話す		0.709				
	Q.33　日常のあいさつ		0.707				
	Q.34　伝達や質問、応答、報告		0.605				
欲求・生活の援助	Q.7　子どもの欲求へ応答			0.923			
	Q.4　子どもの生理的欲求を満たす			0.847			
	Q.5　子どもの生活の援助			0.744			
	Q.8　子どもに応答的に触れ合う			0.675			
	Q.9　子どもの気持ちの受容			0.557			
基本的生活習慣	Q.12 トイレを上手に使う				0.946		
	Q.11　食事の仕方の身につけ				0.842		
	Q.14　衣服の着脱や調節				0.674		
	Q.15　身の回りの清潔にすること				0.566		
	Q.13　運動や食事の後は静かに休む				0.419		
人間関係と集団遊び	Q.19　他者と意欲的に生活や遊びを楽しむ					0.757	
	Q.20　集団遊びとルール作り					0.705	
	Q.18　積極的に外で運動や遊び					0.632	
	Q.21　自分の思いの言語化と相手への配慮					0.522	
自然環境と遊び	Q.27　自然への親しみと関心						0.873
	Q.28　身近な事物を取り入れた遊び						0.681
	Q.26　動植物への関心や世話						0.634
	回転後の負荷量平方和の分散の累積%	46.4	53.9	57.1	59.9	62.3	64.6

第四因子では、「Q.12 子どもがトイレを上手に使うこと」や「Q.11 子どもが食事の仕方を身につけること」、「Q.14 子どもが衣服の着脱や調節をすること」など、保育所での基本的生活習慣の獲得に関する項目となったため、「基本的生活習慣」と命名した。

第五因子では、「Q.19 子どもが保育士や友達と意欲的に生活や遊びを楽しむこと」や「Q.20 子どもが集団遊びを楽しみ、ルールを作ったり守ったりすること」、「Q.18 子どもが積極的に外で様々な運動や遊びをすること」など、友達関係や遊び、集団遊びに関する項目が中心であったため「人間関係と集団遊び」と命名した。

第六因子は、「Q.27 子どもが自然に親しみや関心を持つこと」や「Q.28 子どもが自然や身近な事物を取り入れて遊ぶこと」、「Q.26 子どもが身近な動植物に親しみや関心を持ち世話などをすること」の 3 項目であり、いずれも自然との関わりや自然物などを用いた遊びに関する項目であるため「自然環境と遊び」と命名した。

iii　確認的因子分析

1）初期モデルおよび配置不変モデルの結果

保育内容の有効性に関する保護者の意識の要因構造を検討するための確認的因子分析を実施するにあたり、先の探索的因子分析の結果をもとに、保育内容 6 因子 27 項目の構造方程式モデル（初期モデル）を作成した（図 1）。初期モデルの適合度は、CFI=.914、NFI=.903、RMSEA=.070、AIC=2902.7 となり、妥当なモデルであることが確認された（図 1）。

6 つの潜在変数間から満足度に向かうパス係数では、表現活動が最も高い結果を示した。

その後、満足度の要因を検討するために、分析対象を項目群IIの設問 5「保育所や保育者が今まで以上にあなたの子育ての支援をすることを望みますか」の回答結果により「支援を望む群」と「支援を望まない群」の 2 群に分け、2 群での比較を行う際の条件となる配置不変モデルの成立を確認する多母集団同時分析を初期モデルで実施した。「支援を望む群」と「支援を望まない群」の配置不変モデルによる多母集団同時分析の

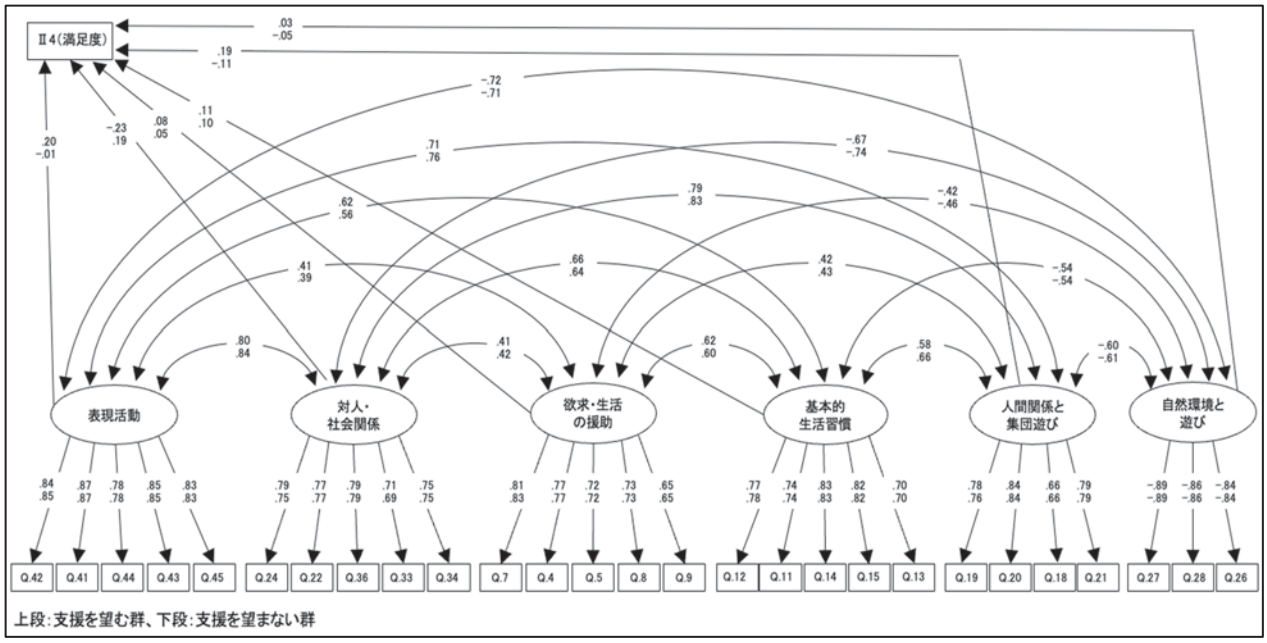

図 1　構造方程式モデル（初期モデル）

適合度指標は、CFI=.905、NFI=.890、RMSEA=.042、AIC=6840.5 となり、設問 5 による区分をしない母集団を対象としたモデルの適合度指標と比較しても高い適合度が保たれたので、配置不変モデルの成立が確認された。

2）測定不変モデルの結果

保護者の支援を望む傾向での満足度構成要因の差異を検討するために、配置不変モデルの潜在変数から満足度を除くすべての観測変数のパス係数に等値制約を課した測定不変モデルを作成した。測定不変モデルの適合度は、CFI=.901、NFI=.882、RMSEA=.042、AIC=6840.6 となり、測定不変モデルが適切なモデルであることが確認された（図 2）。

測定不変モデルによって得られた各群での潜在変数から満足度への係数の比較を表 4 に示した。「支援を望まない群」と「支援を望む群」で有意な差が確認されたパスは「対人・社会関係」と「人間関係と集団遊び」の 2 つであった。具体的には、「対人・社会関係」では、「支援を望まない群」の方で満足度が高く、「人間関係と集団遊び」では「支援を望む群」で満足度が高くなる傾向を示した。これは、今以上の支援を望まない保護者の方が望む保護者よりも「対人・社会関係」に関連する有効な保育内容により満足度を上げることにつながることを意味する。一方で、「人間関係と集団遊び」に関しては、今まで以上の支援を望む保護者ほど「人間関係と集団遊び」に関連する保育内容が子育ての支援に有効であると認識されると満足度が上がることを意味する結果となった。

さらに、満足度に影響を及ぼす要因構造の検討を行うために、「支援を望む群」と「支援を望まない群」の潜在変数間の共分散を比較した（表 5）。

15 の共分散のうち、「表現活動−自然環境と遊び」および「対人・社会関係−自然環境と遊び」、「欲求・生活の援助−自然環境と遊び」、「基本的生活習慣−自然環境と遊び」「人間関係と集団遊び−自然環境と遊び」の 5 つ、つまり「自然環境と遊び」に関連する共分散は負の値を示した。その他の共分散は正の値を示した。

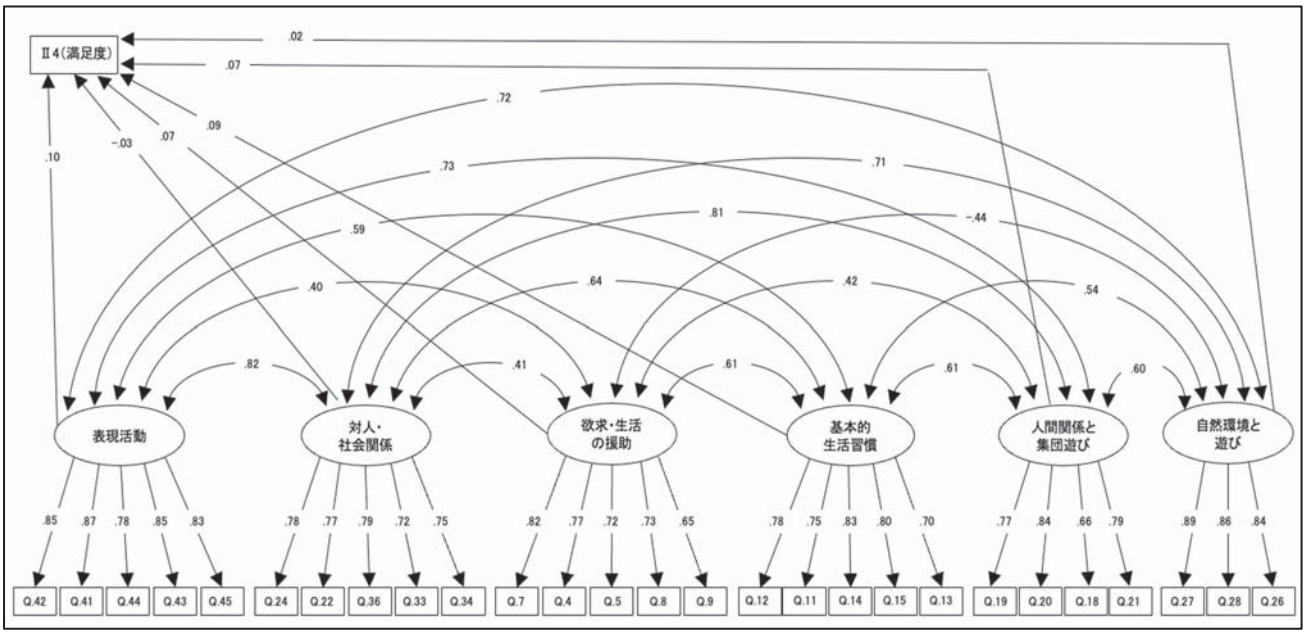

図 2　構造方程式モデル（測定不変モデル）

また、「支援を望む群」と「支援を望まない群」で傾向の違いが確認された潜在変数間の共分散は、「表現活動–欲求・生活の援助」および「表現活動–基本的生活習慣」、「表現活動–自然環境と遊び」、「対人・社会関係–基本的生活習慣」、「欲求・生活の援助–人間関係と集団遊び」、「基本的生活習慣–自然環境と遊び」、「人間関係と集団遊び–自然環境と遊び」の7つであった。

表4　潜在変数から満足度への係数比較

項　目	支援を望まない群	支援を望む群	比較の検定統計量[注2]
表現活動	-.010	.204	-1.934
対人・社会関係	.191	-.234	2.812*
欲求・生活の援助	.052	.084	-.506
基本的生活習慣	.098	.109	-.187
人間関係と集団遊び	-.113	.189	-2.649*
自然環境と遊び	-.053	.034	.969

注1 係数は標準化係数を示す。

注2 注2 標準正規分布による有意水準 *P*<.05

表5　潜在変数間の共分散の比較

項　目	支援を望まない群	支援を望む群	比較の検定統計量[注2]
表現活動 – 対人・社会関係	.840	.802	-1.363
表現活動 – 欲求・生活の援助	.393	.414	-2.467*
表現活動 – 基本的生活習慣	.559	.623	-3.988*
表現活動 – 人間関係と集団遊び	.755	.707	-1.439
表現活動 – 自然環境と遊び	-.711	-.712	-2.634*
対人・社会関係 – 欲求・生活の援助	.423	.407	-1.739
対人・社会関係 – 基本的生活習慣	.637	.662	-2.918*
対人・社会関係 – 人間関係と集団遊び	.835	.789	-1.107
対人・社会関係 – 自然環境と遊び	-.740	-.674	-.124
欲求・生活の援助 – 基本的生活習慣	.596	.621	-1.914
欲求・生活の援助 – 人間関係と集団遊び	.427	.419	-2.124*
欲求・生活の援助 – 自然環境と遊び	-.458	-.674	-.872
基本的生活習慣 – 人間関係と遊び	.662	.584	-0.452
基本的生活習慣 – 自然環境と遊び	-.535	-.542	-2.181*
人間関係と集団遊び – 自然環境と遊び	-.606	-.600	-2.496*

注1 係数は標準化係数を示す。

注2 標準正規分布による有意水準 *P*<.05

IV　考察

i　対象者の特性について

本調査では301か所の保育所に調査票を配布し、保育士は1か所につき5名、保護者は1か所につき10名の回答を依頼した。その結果、本研究の分析対象となる保護者からは1,484件の分析可能回答数が得られた。山口県内の保育所を利用する子どもの保護者のサンプル数としては十分な数であり、本分析結果が信頼するに値する情報になりうると推察された。一方で、保護者の属性である性別において、約90%が女性、つまり母親であったことについては、分析結果の解釈について慎重を期する必要がある。性別によって保育内容への関心の向き方が異なる可能性がある。しかしながら、子育てに関する実態や保育所との関わりと踏まえると、多くの場合において母親が関与しているため、本研究結果は現実を反映していると考えられた。同時に、本調査では、保護者の回答を父親あるいは母親のどちらかが回答するかは制限していない。つまり、子どもの育児に関して、また保育所との関わりについてより理解している方が回答していると推測されるため、性別が女性に偏ったことは、正確な調査が行われた結果だとも解釈できる。

ii　探索的因子分析について

本研究の分析対象となる項目である保育内容については、保育指針を基礎に45項目を設定した。これら45項目の因子分析をした結果、6つの因子が抽出された。保育指針では、「健康」や「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」として5つの領域が設定されている。本調査で用いた45項目も5領域に由来しているが、因子分析の結果は6因子となった。抽出された因子は、「欲求・生活の援助」のように保育指針の「健康」領域に対応する因子がある一方、保育指針の「人間関係」や「言葉」と「表現」のように様々な活動にまたがって関係する領域が収斂され、「人間関係と遊び」といった因子となった。本分析で得られた因子は、より臨床的な保育現場での活動を示していると考えられた。

また、配置不変モデルにおいて、保育内容から生成された6つの潜在変数から満足度に向かうパス係数では、「表現活動」が最も高い係数を示した。「表現活動」は、絵本の読み聞かせや製作活動、踊りや歌などの活動などであり、保育所では日々行われている活動であるとともに、子どもたちが喜んで行う活動である。また、製作物を持って帰る、子どもが家庭で歌ったり踊ったりすることで、保育所での様子が保護者に伝わりやすい活動であるとも考えられた。測定不変モデルにおいても「表現活動」は保護者の意識による差異が見られなかったことから、保護者の意識にかかわらず満足度を上げる要因になりうると推察された。

iii　確認的因子分析について

本研究では、保護者の満足度を構成する要因構造の検討として、保護者が今以上に保育所での子育ての支援を望むか否かによって、満足度に影響を及ぼす保育内容を比較する確認的因子分析を行なった。

保育内容から構成された6つの潜在変数から満足度に向かうパス係数では、2つの係数で保護者の意識によって違いが確認された。また、潜在変数間の共分散の比較では、6つの潜在変数間を結ぶ15の共分散のうち7つの共分散で保護者の意識によって有意な差が確認された。このことは、保護者が今以上に子育ての支援を望んでいるかどうかによって、満足度を上げるための観点が異なることを意味する。このことは、保護者の意識によって子どもにとって有効だと認識する保育内容に違いがあることを意味しているため、保育内容に対する保護者の満足度を上げていくためには、保護者の意識を考慮しながら検討していくことが大切であるといえる。とはいえ、6つの潜在変数間ではおおよそ強い相関関係を示しているため、個々の保育内容を単独で、あるいは偏って実践するのではなく、満遍なく総体的に行うことが結果として保護者の満足度を上げることにつながることが示唆された。

iv　本研究の限界と課題

本研究の限界として、第一には調査対象が一つの県であり、全国の実態を反映しているとは必ずしもいえない可能性を有する。保育は生活に基盤を置く営みであり、保育所で行われる保育内容が地域特性の影響を受けることは容易に推測される。したがって、本結果を大都市部や人口の少ない地域に一律に当てはめて検討する際には注意を要する。しかし、本調査が実施された山口県には政令指定都市はないものの、中核市や小規模の市町が混在している自治体であるため、全国的にも標準的な人口・地理的条件といえる。また、都道府県の水準で同様の全数調査が行われた例はないため、有用な基礎的資料となりうると考えられた。

限界の第二としては、探索的因子分析を行うにあたり、本調査で扱った 45 項目の保育内容すべてで因子分析を行なった点である。加えて最適な因子解を得るために、因子負荷量の小さい項目を除外しながら複数回の因子分析を行なった。その結果、最終的には 27 項目に収斂され、当初の 45 項目から約半数に項目数が減少した。抽出された 27 項目が当初の保育内容、つまり保育指針に示されている保育の内容の全体を網羅しているかどうかは不明である。項目を削除することなく 45 項目のすべてを用いた構造方程式モデルを作成することも可能ではあるが、構造方程式モデルを作成する利点の一つは、構造の単純化と可視化である。本分析では、保育指針の保育内容における子育て支援の有効性に関する保育士と保護者の比較を行うことを目的としたため、詳細な項目での差異を観察することよりも、全体的な傾向の差異を確認することを選択し、構造を単純化することを優先した。今後、詳細な意識の違いを検討していくためには、調査項目毎や保育の特性、他の項目の回答傾向などを勘案した分析が必要である。ただし、本分析において構築されたモデルについては複数の適合度指標を用いて適合度が高いことが担保されている。

限界の第三は、本分析では満足度に影響を及ぼす背景として、今以上の支援を望むかどうかによって保護者の傾向を区分した。本分析結果からも、保護者の意識傾向によって満足度に影響を及ぼす要因構造が異なることが明示されたが、保護者の意識傾向は非常に多様であることは想像に難くない。本研究結果は一つの側面であり、今後もさまざまな観点から満足度を構成する背景を探る必要があると考えられた。

V　おわりに

本研究では、保護者が今以上に保育所に支援を望むか否かの意識を区分し、その意識の違いによって満足度に影響を与える要因を構造的に分析した。

その結果、保護者の意識によって満足度を高める保育内容に違いがあることが確認され、保護者の意識を勘案しながら提供される保育や子どもの育ちの様子を伝えていくことが保護者の満足度を高めるためには必要であることが示唆された。一方で、製作や歌や踊りなどの表現的活動を伴う遊びにおいては、保育による子どもの変化や成長を認識しやすいことから、保護者の意識にかかわらず満足度を高める効果があることも推察された。

最後に、本調査を実施するにあたり、山口県の保育関係の皆様には多大なるご協力をいただきましたとともに、本研究におけるデータの活用をお許しいただいた山口県子育て支援センター連絡会に深謝いたします。

引用文献

1）　石川昭義・堀美鈴（2010）「今日の社会における子育て支援の意味と保育士の役割：犬山市の調査をもとに」『仁愛大学研究紀要　人間生活学部編』2, 82-95

2）　厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』, 16

3）　安川由貴子（2014）「地域子育て支援拠点事業の役割と課題―保育所・保育士の役割との関連から―」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』53, 79-88

4）　小橋明子 ほか（2020）『子育て支援』中山書店，8
5）　田中浩二（2019）『保育所保育の現状と保護者に対する子育て支援に関する調査報告書』，35-39
6）　田中浩二・馬場康宏・浅井拓久也（2021）「保育所保育が保護者の子育て支援に与える影響に関する研究-保育士と保護者の比較から」『東京成徳短期大学紀要』53，42-55
7）　橋本真紀（2001）「地域子育て支援センター職員の専門性に関する一考察―従来型の地域子育て支援センターにおける実践から―」『日本保育学会大会研究論文集』54，610-611
8）　橋本真紀（2002）「地域子育て支援センター職員の専門性に関する考察I」『聖和大学論集』30，1-9
9）　木曽陽子（2011）「「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容のプロセス―保育士の語りの質的分析より―」『保育学研究』40（2），84-95
10）　亀崎美沙子（2018）「子育て支援における保育士の葛藤―保育経験を有する園長の語りの質的分析から」『十文字学園女子大学紀要』49，27-36

An Examination of the Factor Structure of the Influence of Nursery Care on Parents' Satisfaction with Child Care Support
－analysis of differences in parental awareness－

○Haruji HIROSE　　Koji TANAKA　　Motoshi UMEKI

Abstract：

The purpose of this study is to examine how parental awareness of childcare content and childcare support affects parental satisfaction with childcare support at childcare in nursery schools.

One of the survey items asked parents about their level of satisfaction with child-rearing support and whether they wanted more child-rearing support than before, and the other asked whether the 45 items of child-care content were effective in supporting child-rearing.

A factor analysis of the childcare content revealed six factors, including expressive activities. The results of confirmatory factor analysis showed that the six factors of childcare content tended to influence satisfaction and that the covariance among the six factors differed depending on the parents' awareness of whether or not they wanted future support.